

重度・重複障害がある人が楽しく生きることについて

重度・重複障害児と聞いてイメージするのは、寝たきりだったり車椅子だったりして、自由に動けない子どもや、盲聾者であるために新しい出会いがなかなかできない子どもである。

私たちは普段、生きていの中で食べたり話したり見たり聞いたりすることをあまり意識せず、生活を少しでも豊かにするために自分の好きなことを見つける。休みの日には何をして過ごしているだろうか。映画を見たり、料理をしたり、音楽を聴くなど様々な「したい」という感情に合わせて過ごしている。

しかし、重度・重複障害児のように活動できる範囲が限られていると、私たち支援する側としては、障害児の娯楽について考えることが少ないような気がするのだ。それはやはり、「伝わっているか分からない」「同じことはできない」「好きか嫌いかわからない」という思いが先行することが原因だと思われる。確かに社会に出ると、車椅子というだけでも制約されることは多々ある。

重度・重複障害があっても、自分らしく楽しいことをみつけて欲しいという思いは、支援者として誰もが思うことではないだろうか。そのために必要なことは何か。私はどんなことでも、とにかくたくさん経験をするべきであると考えている。障害児は好きか嫌いかわからない、という前にそもそもの経験値が少ない。好きなことやものは多くの経験から見つけられるものである。積極的に色々なことに触れさせてみるのが重要である。

体は動かさなくても音や光や匂いは感じられるし、耳が聞こえなくても音楽の振動は感じられる。できることできないことを私たちが決めてしまっただけではいけないと感じる。